ルナ・レオナード

RUCCA

暖かな目覚め

南向きの家に入る日差しが眠っている少女に差し込む
安らかに眼を閉じている彼女の頬を撫でる女婦人。
母、カミリアは幼い娘が病気がちなのを案じ出来るだけお家の中で出来る遊びや勉強をさせたがる人だった。優しい眼差しと光る瞳は娘ルナと同じターコイズブルーであった。そして、クネクネうねっている金色の髪の毛も母親譲りであった。父親マルクは、真面目で優秀だったが、上に居る上司が頼りにならないせいで休みや地位を与えて貰えない。そして、自分より能力が低いと思ってるのか妻カミリアの言うことには、耳を傾けない。その為、転職をしろと言っても地元を出るのが怖いのか、それとも次の場所でも地位を見いだせなかったらと考えてるのか分からないが頑なにこの土地を愛している。カミリアは、娘の為にも働くべきかといつも考えているが、愛しい我が子は目を離せないほど体が弱いのである。
「ルナ、早く元気になってね。私は、貴方と一緒に行きたい所が沢山あるのよ」
独り言のように、けれど囁くように眠るルナにそう呟いた。
「…本当に、あの人に似なくて良かった」
カミリアは、ルナを撫でてた頬から手を離すと自らの腹部を抑えて溜息混じりに呟いた。
カミリアはルナの為に食事を作るため階段を降りていく。
「お母様、ルナ喉が乾いた」